二月作品

――☆今月の四人☆（小島ゆかり選）――

春の歩数計

大松達知＊東京

〈東京都電車〉の鉄路ふんでゆく大塚に来るときは飲むとき
電柱のAに叱られ電柱のBに慰められて、酔いたり
眠りいしときの歩数のいくらかを加えて春の歩数計あり
焼肉の肉焼く前に写真とるそれは〈焼肉〉ではないけれど
諸説ある、オトナはそんなことを言う小名木四郎兵衛ゆえ小名木川（おなぎがわ）

初雪

福士りか青森

除菌にと買ひし渋抜き焼酎を渋抜きのためやうやく使ふ
寝て起きて雪を眺めて寝て起きてエサをカリポリする猫である
初雪はみぞれのなかを一度二度はらりと白く点滅をせり
ながく剝くりんごの皮にパンチさせ猫と遊べり晩霞晩秋
「シナノスイート」「ぐんま名月」新品種のりんごのなかに津軽の名なし

月集スバル

天地無用

水上比呂美東京

ドア開けて階段降りてドドドドとダッシュでインドへ脱出しよう
欲望と俗念のふえる七十代坊やと散財して遊びたし
あふむいて粉薬飲みあふむいて目薬さして一日三度
散る花としがみつく花それぞれの終り方ありて燃やされる花
こはれやすいものが入つてゐますので天地無用でお願ひします

雨の音

斉藤梢宮城

さへづりも一期一会か友を悼むわれ慰めて秋天より降る
ぱらぱらと傘に生まれる雨の音　今日だけ悲しいわけではなくて
幼子が抱つこしてゐたぬひぐるみ「くまさん」今日も駆除されるとは
父のこと今も先生と呼ぶ人のりんごが届く月命日に
木、空、風わたしを救つてくれないか　まもなく暗い永遠に暗い

――☆――☆――

水島晴子　兵庫

涸れいゆく葉のみなぎりて秋の陽に立ちつくすなり桂ひと木は
みづからの落ち葉根方にめぐらして淡き秋陽を木は浴みてをり
どう見てもわたしに優る友幾にんいとこたちさへ次つぎに逝く
古沼に落としししものか記憶から抜けをり実家の電話番号
西の人なれば清音「ひろふみ」と吉村洋文大阪府知事

高野公彦　千葉

朝なさなサプリを飲めり体より老いの心に効くと思ひて
にこやかにやさしく今日は人に接す高貴高齢者と言はれたく
ただいまを言はず帰宅し独酌を楽しむ暮らし寧けく寂し
化粧など縁なく我は生きて来て歌は時たま薄化粧する
雲間ゆく満月良けれ夜目遠目笠の内なるこの美しさ

奥村晃作＊　東京

新しい本のページを繰りし時虫現われて走りて去にぬ
中華「寿来」のおやじ料理を作りかつ配達に行く凄い働き
歌により命を賜う我なれば歌の降臨をひたに待つのみ
塀の上ノシリノシリと行く猫の猛暑の昼をオシッコに行く
デパートで妻が買い来し鰻重をおいしく食べて満腹となる

森重香代子　山口

戸を繰ればのつそり熊の居るやもとひとりの山居怯ゆるわれは
獣の出没おそれてわれは隣接の山の公園に此の頃ゆかず
レースのカーテンいつしか古りて幾何学の模様が秋の空にさびしも
読書もし夕餉もするなる黒柿の円テーブルは婚家ゆ継ぎし
自転車にいちども乗りしことのなし西日のなかの自転車置場

影山一男　千葉

ミッションはトランプ来日阻止をせよ虚しき空想描く秋の日
作り笑ひ浮かべる女性宰相のニュースを消せば雨の気配す
政権を参政党が握る日の来る未来ありわが死ののちに
右派政権世界に増えゆくこの世紀フランスデモよ甦り来よ
70年代の青年わが思ふ日本は暗し未来も暗し

桑原正紀　東京

酷熱を庭に耐へゐし水仙の球根芽吹く霜月の陽に
水仙のますぐなる葉の伸びゆくは外連味のなき生をおもはす
外連味はまた人間味さはされど〈目立つてなんぼ〉の世の五月蠅さよ
ユーチューブの阿呆映像に寄る蠅の数を競へる奇天烈な世ぞ
三千年前に老子が説きしといふ〈虚無恬淡〉の今にあたらし

狩野一男　東京

先輩に菅原文太、同期には井上ひさし。樋口陽一
護憲派の巨頭と言はれ、あがめられ樋口陽一うざつたからむ
限り無くリスペクトせり憲法の樋口陽一宮城県人
われにあと何回来るや誕生日、その次の日の憲法記念日
やさしさにも程があるゆゑ不肖われ堪忍袋の緒を切らむとす

宮里信輝　神奈川

森林づくりボランティアの活動日今日は久しぶり「南沢林道」
山側は杉の美林なりこの杉の運搬道路が「南沢林道」
今までに杉の切り出しは見たことがなし毎年が草刈作業
日当りが良くて雑草は良く育ち腰の高さの雑草たちよ
草刈機ブンブン回し刈りたれど来年も同じ雑草つよし

小島ゆかり　東京

四ツ谷から市ケ谷へ谷渡りする風のホームに眼冷えつつ
路線図は血管走行図のごとし乗り換へのどこかSuica失くせり
訪日のタラップを降りてくる人のメタリックゴールドのネクタイ
空母に載る高市総理の笑顔見る茶色い埴輪のをんなのやうに
トランプ氏手を振り去りてざくざくと落葉なだるる日本列島

木畑紀子　京都

野の小萩いつしか消えて黄に戦ぐセイタカアワダチソウの獰猛
よくみれば三角あたまのおどけもの背高泡立草も哀しい
外来種セイタカアワダチソウ繁りハロウィンといふ祭りちかづく
仮装して異形の面で脅しあひはしやぐわかもの鬱かかへゐむ
ひとはみな仮の姿に生かされてゐるとおもへば素面がよろし

島田暉　神奈川

実りたる柿の皮むく指のなか小鳥が生まれ空に翔びたつ
空爆に破壊されたる日本が軍備を増やす悪の世に棲む
月光に照らし出されし墓石群白く輝くあの世のビル街
なんとなき束縛を持つ心捨て廻れよ廻れわが観覧車
度の強き老眼鏡をかけしとき月夜の街を死者が行き交ふ

田宮朋子　新潟

暮れのこる茜の空に影なして蝙蝠が飛ぶふるるひるると
虫の声絶えたる夜半をさびさびと枯草色の月のぼりくる
車降り黄葉の渓を見たけれど立看板あり「熊に注意！」と
残菊を剪りて入れおくバケツよりはうはうの体で蜥蜴這ひ出す
生粋の野良なりし猫ちかごろは如才なくわが脚にすり寄る

津金規雄　神奈川

美は愛の盟友なることためらはず謳ひ上げをりロココの絵画
もみぢ葉を運び過ぎゆく風の音聴く夜の床のしじまは深し
甘美なる憎悪のまなざし紛れなきロココの淑女よ額縁のなか
個はすなはち孤なりと識りて夜深し風に乗り来る鉄路のひびき
わが性のめざめの季に出逢ひたり遥かロココの「水浴のディアナ」

小山富紀子　京都

あんたらが喰はない柿を喰つただけ罠にかかりし母熊の唸り
駆除さるる前にせめては柿の実をお腹一杯食べたか子熊
泣きさうなほどの青空けふひと日何が起きるか　起こしてみるか
冷凍の秋刀魚振り上げ「殺せるな」しばし本気の夜のキッチン
白川を愛する会が清掃し赤ままゐのころ抜いてしまひぬ

清水正子　神奈川

寝坊だし夜は足もと危ないしレモン彗星の追つかけ止めた
中年のイケメンかしらレモン山天文台のコメットハンター
天文ファン寝もやらずゐむ二彗星レモンとスワン回帰の秋を
前回は氷河期に来しスワン彗星マンモスもヒトもああんと見けむ
知らざりき金魚にもレモンコメットがゐるなんてああ…泳ぎが速い

藤野早苗　福岡

トランプへ右30度で傾ぎゐるわたしと同じ名前のをんな
この国を背負ふ覚悟といふならばまづ真つ直ぐに立たねばならぬ
忖度はしないと告りて言の刃で切りつけてくるあなた何様
コスパまたタイパといふが跋扈して匠の技の消えてゆく国
ビル陰をうつむき歩み背中より昏れてゆくものならん男は

風間博夫　千葉

「遺伝情報」あれば生物「自己増殖」すれば生物どちらかでいい
生物は動物、植物、細菌であるといふ、生物なりやウイルス
「遺伝情報」あり「自己増殖」しないのがウイルス故に生物である
昆虫は動物、節足動物といふ動物で脚は三対
宇宙からの侵入者なりや頭、胸、腹に別れるからだの君は

木畑紀子歌集　令和7年4月刊　二三〇〇円（税別）　送料三〇〇円
女郎花月　コスモス叢書第1250篇　柊書房
著者住所　〒610-0357　京都府京田辺市山手東一―二二―二〇

田宮朋子歌集　令和7年9月刊　二六〇〇円（税別）　送料三〇〇円
光に濡れる　コスモス叢書第1260篇　角川書店
著者住所　〒940-2056　新潟県長岡市王番田町二一八〇―一

桑原正紀歌書　令和7年9月刊　一七〇〇円（税別）　送料三〇〇円
ようこそ、歌の世界へ　コスモス叢書第1261篇　本阿弥書店
著者住所　〒173-0037　東京都板橋区小茂根三―九―八―一〇六

奥村晃作歌集　令和7年9月刊　二五〇〇円（税別）　送料三〇〇円
天啓　コスモス叢書第1262篇　短歌研究社
著者住所　〒175-0092　東京都板橋区赤塚七―一五―一六

島田暉歌集　令和7年10月刊　二六〇〇円（税別）　送料三〇〇円
昭和の鴉　コスモス叢書第1259篇　角川書店
著者住所　〒246-0015　神奈川県横浜市瀬谷区本郷一―一四―六

小島なお歌集　令和7年12月刊　二〇〇〇円（税別）　送料三〇〇円
卵（らん）降る　コスモス叢書第1263篇　左右社
連絡先　〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷三―五五―一二　ヴィラパルテノンB1　左右社

田中愛子　埼玉

くしやみふたつ続けて出でてはじめから朝のお経を上げなほすなり
少年の勇気たふとびありがたく座らせてもらふひと駅二分
うつ伏せで眠れる人の飛び飛びにゐたり茶房のカウンター席
いとしさもまたかなしさも「愛」なるに気づけりジュニア短歌よみつつ
ぶきような我とおもへりこもまくら高倉健のその次ぐらゐ

橘　芳圀　新潟

西、東巨大伽藍は並み立てど親鸞全集こそわれの寺
辻なれば足止めざらむ本願寺ホールにて聞く底あさき法話
真実信ひそとあるべし本願寺威をほこる門見て素通りす
過疎村に離脱、廃寺の増えゆくに京の本山肩そびやかす
住む町の寺の境内よぎるとき子は生れし寺思ふと言へり

鈴木竹志　愛知

朝より孫のピアノが聞こえくるたどたどしくもやさしき音色
二番目の孫の使ひし「なんでやねん」我もまねして「なんでやねん」と
三人の孫ゐて三人三様に育ちてゆけり当たり前なれど
人間の顔がたくさん映りゐる画面をみつむ　大相撲中継
大相撲九州場所の画面には必ず映る美しき人

原賀瓔子　東京

十三夜のイブ暮れゆきて西空の夕焼けに見るあすの花まる
やくそくの今日きつちりと空晴れてつよい光の後の月いづ
天上に後の月あり衛星の力こぶしを感じるひかり
専用のグラスひつぱり出してきて　月の夜なりリキュールを飲む
見るたびに右へかしげる後の月あかつきちかく寝姿となる

水上芙季　神奈川

子のために子のためにといふ心持ち響き合ひつつ殺したり蚊を
木星に近づくやうな心地して吉岡里帆のポッドキャスト聴く
らりらりのぱつぱーぱつぱーぱつぱつぱー公園に秋みつけ駆ける子
ママの髪ガタンゴトンの髪の毛ね　風呂あがりの脱衣所に二人
夫の低き声がきこえる冬のよる子にクリスマスの本読んでゐるらし

大野英子　福岡

株高つてなあに？　わたしら庶民には高空おほふ不透明雲
美辞麗句並べて強さを強調し強調するほど虚し秋空
エスコートされてはしやいで馬鹿ぢやない日本の卑屈さばかりが目立ち
駄々つ子のおねだり進次郎坊ちやまの「回りはみんな持つてる」なんて
ハロウィン過ぎゆき街はクリスマス曲流れ熊も焦り出さんか

松尾祥子　東京

酷暑にてこもれば庭のかたすみの茗荷の藪は黄の花咲かす
息ふかく吐くべしゴミは棄てるべし老廃物は排出すべし
泣いてるか笑つてるのかわからない二歳児のこゑパパと遊びて
水晶体くもりゐるらし見たくなきこと日々増えるこの世を生きて
一時間家あける我を待つ母はすがる目をせり幼のごとく

鈴木千登世　山口

北風に雪の匂ひの混じる午後皮くりくりと林檎を剝きぬ
甘やかにりんごの香る冬の部屋絵文字連打のＬＩＮＥを待てり
羊水の海かぷかぷと漂へる赤子眠いか　生まれておいで
「赤子」と言ひ「みどりご」と呼ぶ瑞々と匂ふいのちを色に喩へて
雪の日に生まれし吾子に風の日にみどりご届く　父となりたり

小島なお＊東京

神殿の柱のようなベルーガのやがてしずかな崩落を見す
水槽の向こうで息をすれば泡、車椅子から泡を見るひと
両眼を覆われて輪を潜れという指示は水中ゆえ聞こえない
下顎に跳ね返りくる潜るべき輪の輪郭を感じながらに
黙禱のエコロケーション死者たちに宛がわれたる白きベルーガ

小田部雅子　静岡

亡き猫に噛まれし手首きずあとが冷えて目ざめぬ　夜の虎落笛
悲しみが胸を苦しくするしくみ脳にあるらしギューッと痛い
胃の壁がキキキ、キキキと言つてゐる胃に詫びつつもなほビール佳し
ストレッチするたびきしむ膝の骨コクン、コックン　いづれはカサリ
トトトントン、キャベツ切る手よモナリザのやうとたれかに言はれたる手

うたを味わう―食べ物の歌　◉高野公彦

野老の味

―紫式部も食べたらしい―

世をわかれ入りなむ道は後るとも同じ
ところを君も尋ねよ

『源氏物語』「横笛」の巻

平安時代の和歌で、食べ物を詠んだ歌はほとんど無いようだ。食べ物で思い出されるのは、『伊勢物語』九段に出てくる乾飯である。主人公が三河国の八橋という所に来た時の、有名な話。

《……橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭に下りゐて、乾飯食ひけり。その沢に杜若いとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心を詠め」といひければ、詠める。

から衣きつつなれにし妻しあればはる
ばる来ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、乾飯のうへに涙落としてほとびにけり。》

乾飯は乾燥した飯のことで、旅に携帯し、水に戻して食べた。地の文には、このように食べ物も出てくるが、和歌ではあまり見かけない。食べ物を歌に詠むのは上品ではない、という美意識を平安貴族たちは持っていたのだ。

掲出した『源氏物語』の歌は、珍しく「ところ」という食べ物が詠み込まれている。ところはヤマノイモ科の蔓性植物で、根茎を食用とする。地中に伸びた鬚根が老人の鬚に似ていることから、「野老」と書く。この歌では、「野老」に「所」の意味を懸けて用いている。

なお、『実方朝臣集』に「この春はめづらしげなきやけところつれなき人はいかが見るらむ」という歌がある。これを見ると、野老は焼いて食べたようである。

（『うたを味わう』より再録）